武庫川女子大学教育研究所　研究レポート　第46号　83－102
Research Report, No.46 Mukogawa Women's University
Institute for Education, 2016.（別刷）

アメリカにおける女子大学の動向（1）
－ 19 世紀から 1970 年代まで －

Trends of Women's Colleges in the U.S.（1）：
From 19th Century to the 1970s

安　東　由　則*

ANDO, Yoshinori

目次

はじめに
Ⅰ．アメリカ女子高等教育発展の概観
Ⅱ-1．19 世紀（1）：“Female Seminary”の誕生から大学への発展
Ⅱ-2．19 世紀（2）：共学大学の誕生と拡大
Ⅲ．20 世紀前半（WWⅡ終結まで）：女子高等教育の拡大
Ⅳ．20 世紀半ば（WWⅡ後～ 1970 年代）：大学進学率の急伸と共学化
まとめに代えて
引用・参考文献

*武庫川女子大学文学部・教授／教育研究所・研究員

はじめに

アメリカの4年制女子大学は著者の集計では、2012-2013年現在、およそ43校である。2010年と比較しても、わずか3年の間に4大学が女子大学ではなくなったこととなる（安東 2014）。その後も、2014年にはペンシルバニア州ピッツバーグ市の伝統ある女子大学、Chatham Universityが男性の受け入れを表明し[1)]、2015年にはヴァージニア州の小規模な女子大学Sweet Briar Collegeにおいて共学化するとの理事会の決定がなされたことに対して、学生・教職員や卒業生がそれを阻止するための取り組みを行っている最中である[2)]。翻って日本の女子大学は、1998年の最大98校から20校余り減少し、2015年時点で77大学となっているものの、全大学数に占める女子大学の割合は1割程度であり、アメリカと比較した場合、女子大学の校数、割合ともに日本がまだかなり大きいというのが現状である。いずれにせよ、両国とも女子大学の数は着実に減少する厳しい環境にあり、今日におけるその存在意義・理念が改めて問われているとともに、サバイバルをかけた実質的な魅力づくり・環境整備が求められている。

本研究はアメリカの女子大学と日本および韓国の女子大学を比較検討し、今日における女子大学の意義を探る調査研究の一環として行われているものであり、本稿では女子高等教育の普及において先行し、日本にも大きな影響を与えてきたアメリカの女子大学の変遷を概観し、それに影響を与えた社会的要因を検討することを目的とする。女子のセミナリー（Seminary）やアカデミー（Academy）さらに女子大学が誕生した19世紀から、1960-70年代における女子大学の急激な縮小期までを対象とし、女子大学、男子大学、共学大学の学校数、学生数の変化やそれぞれの比率の推移など、数量的データを中心に、その数量的変化を辿っていく。これに社会的背景の検討を加え、女子高等教育の中での女子大学が果たしてきた役割、女子大学を変化させてきた社会的要因を考察する。ただ、1960年代および70年代の変化における高等教育の激変、すなわち、進学率の急速な伸びや女子大学の激減と共学化などについての社会的要因の検討においては、非常に複雑で、多様な要因が絡まりあっており、この検討にはかなりの紙幅を要することから、次号以降の別稿にて、1980年代以降の動向も含めて検討をしていくこととする。

Ⅰ．アメリカ女子高等教育発展の概観

まず、アメリカにおける女子高等教育の始まり、女子大学としての発展と縮小の歴史について簡潔に振り返っておく。アメリカの女子高等教育は世界で最も早く発達し、女子の高等教育機関在籍者は、19世紀末ごろには、全高等教育機関在学者の三分の一強（35％）を占めるようになっていた（後出、表1）。19世紀中ごろから“大学”としてのチャー

ターを（それぞれの地域の団体において）正式に受けた女子大学（women-only college）が広がっていったのもアメリカであった。日本の女子大学が初めて正式に大学として認められるのは第二次世界大戦後の 1948 年であり、女子の大学進学も東北帝国大学などの例外はあったにせよ、戦後の新制度を待たなければならならなかったのであるから、アメリカではその 100 年以上前に女子の大学進学が認められたことになる。もちろん、女子高等教育の内容や質、大学を認可する地域団体の問題など、アメリカの独自性を考慮しなければならないものの、女子の中等・高等教育進出の早さという点で、群を抜いていた。

このように先行したアメリカの女子高等教育は、近代日本の、さらに WW Ⅱ後の女子高等教育にも大きな影響を与えた。明治期においては、キリスト教のアメリカン・ボード（American Board）を中心とする女子高等教育機関の設立（例えば、明治前期の神戸女学院、梅花、東洋英和、フェリスなどの女学校、大正期にはプロテスタント諸派による東京女子大学の設立など）、津田梅子の女子英学塾や成瀬仁蔵の日本女子大学にしても、アメリカ女子教育における思想やカリキュラム等の影響を大きく受けており、戦後改革における女子大学の設立についても、教育使節団にいたアメリカの女子大学関係者の影響が強いことは周知のとおりである。このように、日本の女子大学はアメリカの女子大学をモデルにしてきたのであり、その存立基盤や意義を考える上において、アメリカの女子大学の歴史は、押さえておかなければならない重要なポイントなのである。

表 1 は、1869-70 年以降、120 年間の高等教育機関（学位授与機関）在学者の変遷を 10 年ごとに区切り、辿ったものである（NCES 1993）。在学者は男女とも順調に増加し、大恐慌前の 1920 年代、さらには WW Ⅱ後の 1940 年代末から 70 年代にかけては、大きくその在籍者数、人口に占める学生比率を増加させていった。ここで注目したいのは在学者に占める女性の割合である。WW Ⅱ以前においては 2 年制の教員養成大学の在籍者が多かったとはいえ、19 世紀の終わりには三分の一強を、20 世紀入ると 4 割近くを女性が占めるようになる。大恐慌後の 1930 年代には職業分野における男性優位の政策もあって少し女子占有率は下がるものの、WW Ⅱ前において女性が高等教育機関在籍者の 4 割を占める国は他になく、世界の中で最も女性の大学進学が高まった国であった。

WW Ⅱや朝鮮戦争の後、GI Bill（復員兵援護法）により大量の男性が大学入学したことにより女性比率は大きく落ち込むが（1949 年：29.6％、1959 年：35.9％）、その後は急速に回復し、1979 年には半数を超え、2010 年では 57％に達し、男子を 10％以上引き離している（NCES 2013, Table 301-20）。

このようにアメリカでは、男女で教育内容の差が少なからずあったにせよ、女性の高等教育における学習機会が 19 世紀後半という比較的早い時期から開かれていた。以下においては、女子大学がどのようにして誕生して、広がっていき、その後、1960-1970 年代に共学化や閉鎖という形で急速な縮小の道をたどったのかを、三つの時期（① 19 世紀、②

20 世紀初～ WW Ⅱ、③ WW Ⅱ後～ 1970 年代）に区切り、数量的なデータを中心にレビューする。

表 1．高等教育機関数と男女別学生数の推移：1870-2012

Year	1869-70	1879-80	1889-90	1899-1900	1909-10	1919-20	1929-30	1939-40
Total institutions	563	811	998	977	951	1,041	1,409	1,708
Total fall enrollment	52,286	115,817	156,756	237,592	355,213	597,880	1,100,737	1,494,203
Males	41,160	77,972	100,453	152,254	214,648	314,938	619,935	893,250
Females	11,126	37,845	56,303	85,338	140,565	282,942	480,802	600,953
Female Rate	0.213	0.327	0.359	0.359	0.396	0.473	0.437	0.402

Year	1949-50	1959-60	1969-70	1979-80	1989-90	1999-2000	2009-10	2011-12
Total institutions	1,851	2,004	2,525	3,152	3,535	4,084	4,495	4,706
Total fall enrollment	2,444,900	3,639,847	8,004,660	11,569,899	13,538,560	14,791,224	20,427,711	20,994,113
Males	1,721,572	2,332,617	4,746,201	5,682,877	6,190,015	6,490,646	8,769,504	9,026,499
Females	723,328	1,307,230	3,258,459	5,887,022	7,348,545	8,300,578	11,658,207	11,967,614
Female Rate	0.296	0.359	0.407	0.509	0.543	0.561	0.571	0.570

出典：National Center for Statistics, Digest of Education Statistics: 2013. Institute of Education Sciences. Table 301.20 Historical summary of faculty, enrollment, degrees, and finances in degree-granting postsecondary institutions: Selected years, 1869-70 through 2011-12 (https://nces.ed.gov/programs/digest/d13/tables/dt13_301.20.asp)

Ⅱ-1．19 世紀（1）：“Female Seminary”の誕生から大学への発展

女子大学の前身は、19 世紀中ごろから北東部を中心につくられ始めた“Female Seminary（あるいは Female Academy）”といった名前をもつ、女子向けの教育を施そうとする学校である。女性に対して大学への扉が閉ざされていた当時、女性への更なる高度な教育の機会や教師等の職業訓練の機会を提供するべく、女性教育推進の先駆者たちやプロテスタント系の教会などによって次々と設立されていった[3]。その教育内容では、宗教的な敬虔さ、女性としてのマナー、家事等の役割などを教える、教師などの職業訓練を行う、あるいは男性と伍した学問の女性への提供を目指すなど様々であった。多くは、宗教的敬虔さとともに、しつけなどを含めた基礎教養的な女子教育を行う場として設立されていったようである。そうした初期の Female Seminary の中で、後に続く学校のモデルとなり、大きな影響を与えたのが、1837 年、Mary Lyon によって創設された Mount Holyoke Female Seminary（今日の Mount Holyoke College の前身）である[4]。この学校は、女性としてのマナーの習得や宗教的な敬虔さの獲得を教育の第一目的とするのではなく、教育において高い学問的水準を維持しようとした。例えば、当時女子の学校として前例がなかった科学や数学を卒業必修とするなどのカリキュラムを組んだ。1888 年には大学として許可状（Charter）を受けており、もっとも古い女子大学の一つといえる。

この他、女性教育推進の先駆者としては、Sarah Pierce や Emma H. Willard、さらに Lyon と同世代で助け合った Catharine E. Beecher（Hartford Female Seminary を創始）

らがおり、彼女たちは若い女性に対する教育機会を広げていくとともに、女性の学校にもより高度な学問をカリキュラムとして取り込み、結婚準備教育に終わらない、よりしっかりとした教育カリキュラム、組織を作っていこうと考え、それを実践した[5]。

女性のための教育機関の創設は、教会の他にも篤志家の男性らによっても促進された。酒造会社を営んでいた Matthew Vassar によって 1861 年に Vassar Female College（後の Vassar College）が創設されるなど、男性篤志家によって作られた女子学校もたくさんあった（Tylor et al. 1915）。近代化が進展し、19 世紀（特に半ば）より初等教育が広がる中、このように多くの女性向けの中等、あるいは教員養成を含む高等教育機関が求められ、創設されていった。

数多く創出された Female Seminary（あるいは Academy）ではあるが、その学問的レベルや地位は概して低いものであった。このような中にあって、19 世紀末までに、より男子大学と伍するレベルの高度な学問的内容（リベラル・アーツ）のカリキュラムを取り入れた前述の Mount Holyoke をはじめとする女子高等教育機関が北東部に設立されていった。そうした学校は優秀な女子学生を集めるようになり、高い威信を得て、後に“Seven Sisters”と称されるようになる[6]。即ち、Mount Holyoke（1837…創設年、以下同様）、Vassar（1861）、Wellesley（1870）、Smith（1871）、Radcliffe（1879）、Bryn Mawr（1885）、Barnard（1889）の 7 校（ただし、Radcliffe は Harvard Annex として設立された年）である[7]。これら 7 校のうち 5 校は、創設時に大学として認可されたが、最も設立の早かった Mount Holyoke は設立から約 50 年後の 1888 年に、Radcliffe は 1894 年に Radcliffe College として独立した際、それぞれ大学の許可状を得たのである。南北戦争後、女子の社会進出への期待がかけられ、平等への意識も高まる中、女子の Seminary や Academy が、女子大学へと次々と昇格していき、19 世紀終わりまでにこの 7 校をはじめ少なからぬ数の女子学校が大学の地位を得た。先述のように、これら“Seven Sisters”と称される女子大学は、高度なレベルのカリキュラムを追及し、女性への教育の質を高めようとした先駆として位置付けられる。中でも Vassar は、男子大学と同等の教育内容を女子に教授することを目的として設けられた女子大学であり、この後に設立される Wellesley や Smith の手本ともなった（Woody 1929, 村田 2001 等）[8]。

Ⅱ-2. 19 世紀（2）：共学大学の誕生と拡大

19 世紀初めまで、大学は男子のみを対象としており、共学大学も女子大学も存在しなかった。女子の大学（College）として初めて許可されたのは Georgia Female College（現在の Wesleyan College）だとされ、それは 1836 年（開学は 1838 年）のことであった[9]。共学大学が初めて誕生したのは、1837 年に女性の受け入れを始めた Oberlin College（オ

ハイオ州）がその嚆矢だとされる（Solomon 1985, Miller-Bernal & Poulson 2004 など）。共学大学については、その後、特に南北戦争（Civil War）中の 1860 年代から、共学化する大学が増加していった。共学大学の増加に大きな影響を与えた要因の一つが、南北戦争中の 1862 年に成立した Morrill Land-Grant Colleges Act であったとされる。一方で産業革命が大きく進展して産業形態が変化し、他方で南北戦争による国土の荒廃が進行する中、連邦政府はその所有する土地を州に供与し、中産階層の人々を中心として農業や工学などの実学を学ぶことができる高等教育機関を設置させ、産業を復興し、一層進展させようとしたのである。こうして誕生した新たな大学は、南部ではまだ保守的で男女別学であったものの、他の地域（特に私学が少なく、開発途上であった西部、中西部）では性別を問わず教育の場を提供しようとする大学が広がり、女性の高等教育進学（教員養成を含む）に大きな役割を果たした。若い男性が南北戦争に従軍する中、私立大学においては、学生集めに窮した男子大学が、女性にも門戸を開くようになったとの指摘もある（Harwarth 2009 など）。その結果、1870 年までに、大学のうち約 30％が共学になり、1880 年時点では、大学の半数近くの 46％が共学となった。共学校のうち 72％は共学として創設されたものであった（Goldin 2010, p.9）。

伝統ある“Ivy League”と称される北東部の 8 大学は、全て男子大学であった。その中で例外的なのは Cornell University である。8 大学中、唯一 19 世紀（1865 年）に設立された最も新しい大学で、しかも私立であるものの Land-Grant College として出発したこの大学は、設立 5 年後の 1870 年には、女性の受け入れを認めるようになり、最も早く共学化した[10]。この他の Ivy Leaguers の中では、University of Pennsylvania が 1876 年、Brown University が 1891 年にそれぞれ共学化しており、学生に占める女子の比率は小さかったものの、8 校中 3 校が 19 世紀中に共学化したのである。他の 5 大学が女性に門戸を開くのは、WW Ⅱ後、さらに約四半世紀を過ぎる頃であった。

図 1 は、1830 年以降に設立された共学、別学（男子、女子）の高等教育機関の累積数を経年で示したものである（但し、1934 年時点で存在した機関）。これによると、共学として開学した大学が、1860 年代ごろより、急速に増え続け、1890 年代に至るまで続いたことが分かる。それ以後、増加率は鈍るものの、WW Ⅱが始まる前の 1930 年代終ごろまで増加基調は続いた。これに対し、男子大学として開学した大学は、1890 年までは緩やかに増えるが、それ以後ほとんど増えなくなっている。これに対して女子大学は、共学大学より増加率は緩やかであるものの 19 世紀後半を通じて増え続け、その傾向は 1930 年頃まで続いた。

19 世紀後半から“共学”として設立される大学が急速に増えた結果、19 世紀末には、共学大学の数が男子大学の数を上回るまでになっており（後出、表 3）、Goldin（2010）によれば、1897 年時点で、全学部学生の 56％、女子学部生の 60％は、共学大学に在学

していた。男子大学に対して、かなり遅れて出発した女子大学はその数を順調に増やしていったが（特に北西部と南部）、女子高等教育の場は、19 世紀終わりにおいては既に共学大学へと移行していったのである[11)]。

図１．共学、別学として開学した大学の累積数の変化（1934 年サンプル）

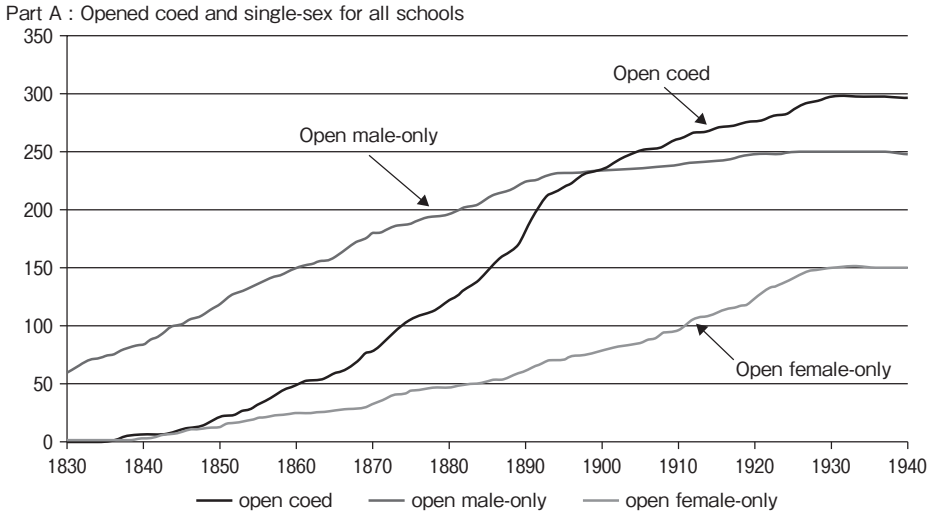


Figure 1 : Cumulative Number of Schools Opened as Coed and Single-Sex by Year of Opening and Control (1934 sample)

出典：Goldin 2010, p.38.　Figure1 より。

Ⅲ．20 世紀前半（WW Ⅱ終結まで）

先の図 1 が示すように、20 世紀になると新たに男子大学として開学する大学数は鈍くなるが、共学大学と女子大学は大恐慌が起こる 1920 年代末まで増加し続けた。女子大学の設立は、19 世紀後半から、多少の波はあるものの継続的に創設がなされて、特に 1910 年代と 20 年代には多くの女子のみの高等教育機関が設立され、1920 年代半ばまでに男子のみの大学数を上回るようになった（Goldin 2010, p.9）。1940 年代初めまでには、150 校ほどが女子大学として創設されていたことが分かる。

大学（2 年制含）在籍者数をみると、20 世紀初めの 30 年で、その数は大きく増えた（表 2）。1899-1900 年と 1909-1910 年の 10 年間で 50％増加し、次の 10 年（1910 年代）では 68％、さらに次の 10 年（1920 年代）では 84％の増加をみた。その結果、18-24 才人口に占める大学進学者割合は 2.3％（1899-1900 年）から 7.2％（1929-1930 年）へと大幅に伸びたのである。この 20 年間において、特に女子学生の伸びは大きく、男子学生が

2.1 倍となったのに対し、女子は 2.5 倍であった。女子学生の比率は 1910 年に約 4 割（39.7％）となり、さらに 10 年後の 1910 年代末（1919-20）においては約半数の 47.3％にまで到る。大恐慌後の 1930 年代は、大学在籍者の伸びは鈍ったものの、1930-40 年の 10 年間において全体では 35.7％の増加があった。男女別では男子が 44％増加したのに対し、女子は 25％と低くなった。大不況の中、男性若年者の方が大学へと多く進むようになり、女子の進学は抑制されたことが分かる。これによって女子学生比率は少し落ち込み、1940 年時点で 40.2％と、30 年前の水準（39.7％）と同程度になった（表 1、2）。

上で見てきたように、男女の学生比率は、1910 年には 4 割程度になり、その後 1920 年頃には半数近くまで達するものの、大恐慌等もあり WW Ⅱまでは約 4 割程度で推移する。女性の比率がかなり高くなってきてはいるものの、男女で平等になったわけではない。女性の比率の高さは、4 年制大学のみならず、2 年制の教員養成等の大学に多くの学生が在籍していたことによる。Goldin（2006）は、大学に在籍した女子学生について、その内訳を述べている。1925 年を例にとると、私立大学に在籍していた女子学生のうち、“Seven Sisters”に在籍したのはたったの 5％、女子大学の在学者は 22％であった。女子学生全体の 55％は公立の大学に在籍していたのである（よって私立大学には 45％が

表 2. 1869 年以降における高等教育機関在籍者数と女子割合の推移

年	学位授与高等教育機関在籍者（千人）	男性（千人）	女性（千人）	女性割合（％）	18-24 才人口比（％）
1869-70	63	49	13	20.6	1.3
1879-80	116	78	38	32.8	1.6
1889-90	157	100	56	35.7	1.8
1899-1900	238	152	85	35.7	2.3
1909-10	355	215	141	39.7	2.8
1919-20	598	315	283	47.3	4.7
1929-30	1,101	620	481	43.7	7.2
1939-40	1,494	893	601	40.2	9.1
Fall 1949	2,445	1,722	723	29.6	15.2
Fall 1959	3,640	2,333	1,307	35.9	23.8
Fall 1969	8,005	4,746	3,258	40.7	35.0
Fall 1979	11,570	5,683	5,887	50.9	38.8
Fall 1989	13,539	6,190	7,349	54.3	51.4
Fall 1999	14,850	6,515	8,335	56.1	55.6 ＊
Fall 2009	20,428	8,770	11,658	57.1	66.9 ＊

※在籍者は男性、女性の計であるが、千人単位で四捨五入されているので、合計の数字が合わない場合がある。Part-time Student を含む。

出典：National Center for Education Statistics,（1993）, *120 years of American Education: A Statistical Portrait*. Table 24, pp.76-77. より作成。
1999 及び 2009 年（＊）は、NCES, *Digest of Education Statistics：2012* table19 及び table221 より作成。

在学)。さらに、全女子学生のうち30％が2年制の教員養成大学に在籍していたのに対し、男子は8％であった（Goldin 2006, pp.135-136）

女子学生の大きな伸びは、女子大学数の増大もさることながら、公立（主に州立）を中心に私立も含めた共学大学が多く開学したことが大きく影響していた。Goldin（2010）は、1930年代までの共学大学の増大は、女子の大学進学に大きなインパクトを与えたと指摘している。なぜなら、私立の女子大学に通わせることは金がかかるのであるが、共学大学の多くは公立であり、費用が安くて済む。さらに公立大学をつくる州としても、男女別々に大学を作るよりも、共学大学を一つ設立する方が建設や管理運営の費用が少なくて済むというメリットもあった。こうした共学大学の出現は、男性もさることながら、むしろ女性の教育を促進したのである（Goldin 2010, pp.1-2）。

この変化の内容をさらに詳細に検討していく。表3と表4はそれぞれ、1870年以降の共学大学と別学大学の大学数および学生数の比率の推移を表わしている。共学・別学ごとの大学数比率では（表3)、1870年において男子大学が59％と6割を占めていたのに対し、共学大学はその半分以下の29％であった。それが20年後の1890年には、共学が43％と半数近くになって、37％の男子大学を上回った。さらに共学大学の比率は1910年に58％、1930年には69％となり、WW Ⅱ後も上昇を続ける。学生数に占める共学大学学生の割合（表4）は、学校数の割合以上に高く、1870年41.4％、1910年75.7％、1930年には82.9％となり、20世紀初めの段階で、圧倒的多数を占めるようになる。共学として開学した公立大学の学生規模は、私立別学大学のそれを上回っていた。

男子大学の比率は、一貫して下がり続け、1930年には女子大学の数が男子大学を上回るに至った。女子大学の比率は、1870年に12％であったものが、1890年には20％となり、表3にある年代の中では最も高い比率となった。その後、1910年に15％、1920年に16％、1957年には13％となり、比率は下がっているものの、そのスピードは男子大学に比してかなり緩やかであった。この期間、共学大学には及ばないものの、女子大学はその数を着実に増やし続けたからである。女子大学に在籍する学生数は1940年頃にピークを迎えるが、それまで一貫して増加し続けたのである（表4)。ここで注目したいのは、1920年～1960年まで、とりわけWW Ⅱまでの期間において、女子大学の中でもカソリック系の女子大学の学生数が大きく伸びていることである。1900年まではプロテスタント系や非宗教が主であり、カソリック系はほとんど存在しなかったが、1920年代、30年代に急速な増加を見せ、その傾向は戦後の1960年代まで続く。1920年にわずか2.5千人であったカソリック系女子大学の学生数は、10年後の1930年には4倍の10.1千人、さらに10年後の1940年にはその2.5倍の26.5千人へと急速に増加した[12]。図1で示されたように、1910年代～30年代において女子大学の数は大きく増えているが、そのうちカソリック系の大学が多くを占めたことが分かる。

表 3. 男子大学、女子大学、共学大学の割合（1870-1981）

年	大学数（校数）	男子大学（%）	女子大学（%）	共学大学（%）
1870	582	59	12	29
1890	1082	37	20	43
1910	1083	27	15	58
1930	1322	15	16	69
1957	1326	13	13	74
1976	1849	4	5	91
1981	1928	3	5	92

出典：1870-1957 年は Newcomer,（1959）より作成。
1976-1981 年まで、Solomon,（1985）, p.44, Table 1. より作。
注：“College Navigator” では、4 年制の学士学位授与男性大学 65 校、同じく女性大学 50 校であった。既に共学化している大学もあり、この数字は信用できない部分もあるが、Solomon と同じ基準ということで、上の数字をもとに算出した。

表 4. 1960 年以前における共学大学在学者割合推移，及び女子大学の設置者別在学者比率推移

年	合計（千人）	共学大学（千人）	共学大在学者割合(%)	女子大学				
				女子大学合計(千人)	公立 4 年制大学	私立 4 年制大学 非カソリック	私立 4 年制大学 カソリック	教員養成・短大(公私)
1869-70	11.1	4.6	41.4	6.5	-	2.2	0.1	4.2
1879-80	39.6	23.9	60.4	15.7	-	11.2	0.1	4.3
1889-90	56.3	39.5	70.2	16.8	-	11.9	0.2	4.7
1899-00	85.4	61.0	71.4	24.4	0.2	16.3	0.2	7.6
1909-10	140.6	106.5	75.7	34.1	0.1	20.8	0.4	12.8
1919-20	282.9	230.0	81.3	52.9	6.4	24.7	2.5	19.4
1929-30	480.8	398.7	82.9	82.1	18.3	36.5	10.1	17.2
1939-40	601.0	494.9	82.3	106.1	24.5	37.2	26.5	17.9
1949-50	806.0	709.1	88.0	96.9	9.2	30.8	35.2	21.7
1959-60	1019.0	920.7	90.4	98.3	11.1	30.9	42.9	13.4

※女子大の数字の単位は（千人）

出典：Newcomer,（1959）, p.49、Table 3. より作成。

20 世紀初頭から WW Ⅱまでの動向をまとめると以下のようになる。前世紀後半から引き続いて州立を含めた共学大学が多く誕生し、大学比率、学生比率ともに共学大学が大部分を占めるようになり、増加した女子学生も共学大学に収容されていった。その結果、大学において女子学生の占める割合は、4 割を超すまでになった（但し、教員養成等の 2 年生大学を含む）。同時に女子大学の増加も継続し、女子大学への在学者数もまた増えていったが、その増加率は緩やかであった。この時期、特に 1920 年代以降増えた女子大学は、カソリック系の大学が多く、急速に増加していった。

Ⅳ．20 世紀半ば：WW Ⅱ～ 1970 年代

第二次大戦（WW Ⅱ）後から 70 年代までの期間は、高等教育が急速に進展し、アメリカでは世界に先駆けて若者世代の大学進学率が 30％を超えて“マス段階”を迎えた特徴的な時期であることから、本節では少し詳細に状況を検討していく。よって、前半において高等教育全般の状況を概観したのち、後半で女子大学の動向を分析していく。

（1）全体の動向

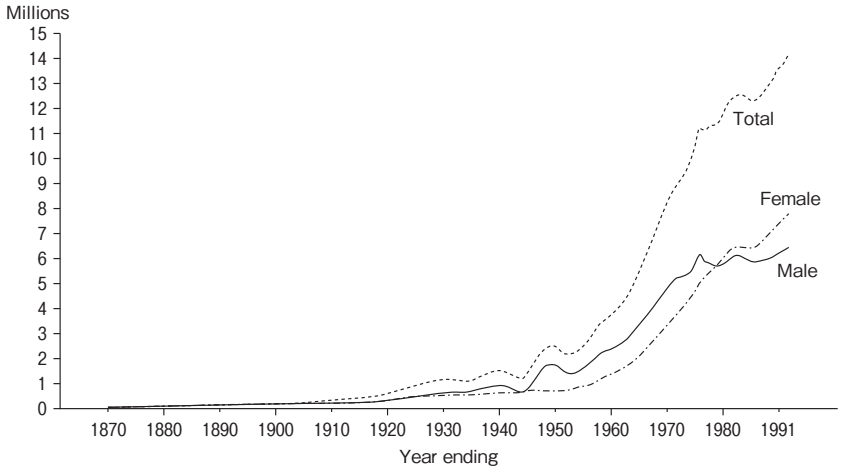
WW Ⅱ後のアメリカの大きな特徴は、経済がさらに発展する中で大学進学率が急速に伸びたこと、その流れの中で WW Ⅱ後のベビー・ブーマー（1946 ～ 50 年代生まれ）が 60 年代半ばより大学進学をするようになり、大学生の数が急速に増加したことである。特に、1950 年代半ばから 1970 年代における大学進学者の伸びは大きく、早かった（図 2）。1950 年代の 10 年（1949-59）で 49％、1960 年代（1959-69）では実に 120％も大学在学者が増え、次の 70 年代においては伸び率が緩くなったとはいえ、45％の増加をみた（表 1）。その結果、1969 年には、18-24 才人口中 35％が大学に進学した計算となり、Martin Trow（訳書 1976）が言うところの「マス段階」にいち早く突入した。

大学在学者の男女比率は、WW Ⅱ中に若い男性が戦争に駆り出されていたため、1943-44 年には女性の割合が 49.8％と半数近くになった（NCES 1993, p.76, Table24）。しかし戦後においては、女子の在学者率は少なからず下がり、その傾向は 1960 年代半ばまで続いた（表 2 及び図 2）。女子比率が下がった要因としては、WW Ⅱと朝鮮戦争後の GI Bill（復員兵士援助法）による復員兵士（ほとんどが男性）の大学入学によるところが大きい。その結果、WW Ⅱ後の 1947-48 年には、大学在学者の男女比は大きく偏り、女子の在学比率は 29.0％前後にまで落ち込んだ。その後、1960 年代後半よりその差異は小さくなっていき、1969 年に女子の比率は 40.7％、1979 年には初めて過半数（50.9％）となり、以後は女子の在学者比率の方が一貫して高くなっていった（NCES 2011, Table 221 及び Goldin 2006、p.137）。

この間の大学入学者の大幅な増加要因としては、先述の GI Bill、経済成長に伴う新中産階層の増大による進学率の増加の他、1960 年代半ば以降においてはベビー・ブーマーが大学進学を迎えたことが挙げられる（図 3）。急速な大学進学者の増大に対しては、主に州立大学によって受け入れが図られた（図 4）。私立大学もその数は増えたものの（4 年制大学 1959-60 年；1,055 校であったものが、1979-80 年；1,399 校　NCES 2012, table306）、収容人員数の伸びは少なく、増加した進学者の多くは州立大学が吸収した[13]。

図２．性別で見た高等教育機関在籍学生の推移：1869-70 から 1990-91

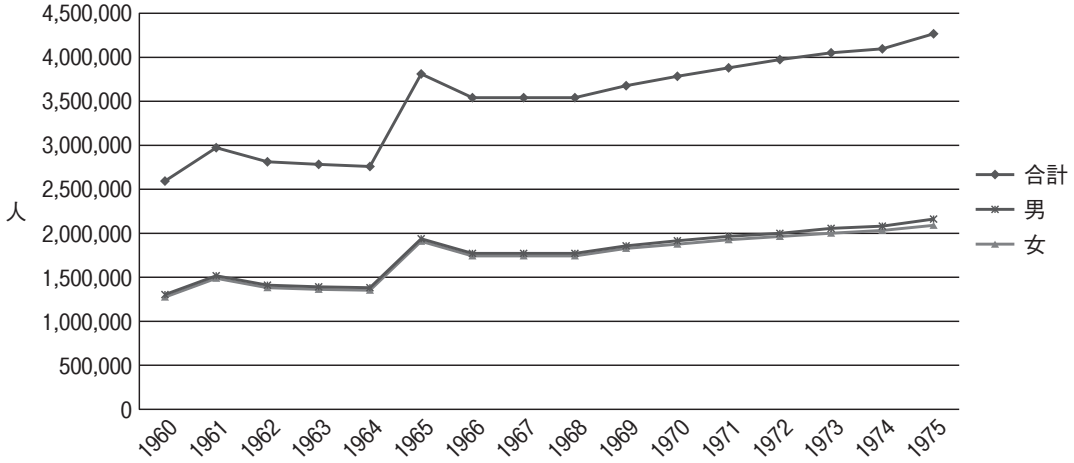
Figure 14.--Enrollment in institutions of higher education, by sex : 1869-70 to 1990-91



Source : U.S. Department of Commerce. Bureau of the Census. Historical Statistics of the United States. Colonial Times to 1970; and U.S. Department of Education. National Center for Education Statistics. Digest of Education Statistics. various issues.

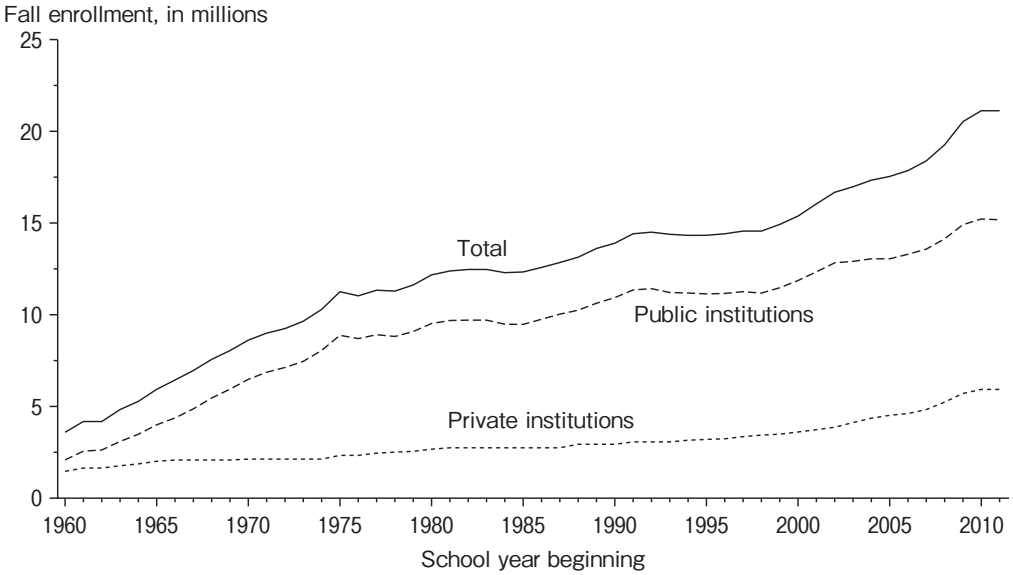
National Center for Education Statistics（ed.）（1993）. *120 Years of American Education: A Statistical Portrait.* U.S. Department of Education. P.65. Figure 14.

図３．アメリカにおける 18 歳人口の推移（1960-75）



データ：United States Census Bureau.（http://www.census.gov/popest/data/historical/index.html）

図 4. 公立大学と私立大学の在籍学生数の推移（1960 年以降）



出典：NCES 2012、*Digest of Educational Statistics 2012,* Figure 12.
（http://nces.ed.gov/programs/digest/d12/figures/fig_12.asp?referrer=figures）

1960 年代から 70 年代の学生数の増大におけるもう一つの大きな変化は、パートタイム学生の受け入れと 2 年制大学のシステム（Community College）が整えられたことである。これによって成人を中心とするパートタイム学生が大学において大幅に増加し、1969 年には全学生の 31％であったものが、1979 年には 41％を占めるに至った（NCES 1993, p.66）。

（2）女子大学の動向

以上、高等教育全体の傾向を見てきたが、1940 年頃には 150 校くらいの設立があった女子大学はどうなっていったのか（図 1）。Wilson（1973）によれば、1960 年において女子大学であると自己規定していた大学は 298 校あり、それが 13 年後の 1973 年時点では 146 校になっていたとする。村田（2001）によれば、出典は不明であるが「1968 年に 248 校あった女子大学は、2 年後の 1970 年には 150 校にまで減少している」（p.102）と述べている。Harwarth, I.（1997）は、Conway, J.K.（1989）を引用しつつ、1960 年に 233 校あった女子大学は、1986 年にはたった 90 校となり、特に 1968 年 6 月と同じ年の 10 月の間に、64 校の女子大学が共学化するか、閉校となったとする。Chamberlain, M.K.（1988）は、同じ時期（1960 年～ 1986 年）に、81 大学が閉校するか共学化をするかしたと見積もっている。これらの数字は、いずれも 2 年制大学を含んだ統計であると

思われる。大学数に多少の違いはあるものの[14]、1960年頃には200校以上あったであろう女子大学が、60年代終わりから70年代初めにかけて急速に減少していった。この時期は、single-sex大学、特に女子大学にとって大きな岐路となった時期であり、これらの数字は、その変化の大きさを物語っている。

4年制女子大学に限った数字で言えば、1960年と1990年の間の女子大学の変化を詳細にまとめているStuder-Ellis（1996）の研究が信頼できる。表5からは、1960年以降では、1962年の183校が最多となっていることが分かる。1960年代中頃は、大学進学率の上昇とともに[15]、戦後の第一次ベビー・ブーマーの学生が大学に入学した時期が重なり、2年制を含む大学学部在籍者は1960年において約323万であったものが、1965年に483万、1970年には755万となり、飛躍的に増加したのである（江原1994, p.37、NCES 2012など）。1963年以後、女子大学の共学化が目立つようになるが、特に激しいのは1969年から1971年の3年間である。1960年から90年の31年間に共学化した108校のうち、この3年間に53校が集中しており、約半分を占める。1969年はIvy LeaguerのPrincetonとYaleが女子に門戸を開いた年であり、翌1970年は“Seven Sisters”の一つVassarが男子に門戸を開いた年であり、single-sexの大学にとって、大きな転換点であった[16]。

表6は、1960年時点で女子大学であった大学が、30年後の1990年にどうなっていたかを示したものである（Studer-Ellis 1996）。これによれば、この30年間に共学化した女子大学の多くはカソリックの女子大学であったことが分かる。共学化した108校のうち、77校（71％）をカソリックの女子大学が占める。共学化した率はカソリック系の60.2％に対して、同じ宗教系でもあってもプロテスタント系の女子大学のそれは半分以下の28.6％であり、大きな差異があった。128校のカソリック系女子大学のうち、共学化、合併、解散をせずに女子大学として生き残ったのは30校（23％）に過ぎない。非教派の女子大学としての生き残り率が51.2％、プロテスタントが61.9％であるから、どの女子大学も生き残りは大変に厳しいものであったことに変わりないが、中でもカソリック系女子大学は大きな変化を余儀なくされたことが分かる。1920～30年代に多くが設立されたカソリック系大学は、歴史も浅く、規模も小さかった。また、フェミニズムの運動も強くなる中、旧来の価値観（信仰に基づいた男女観、性役割観など）を強く押し出すカソリック系女子大学にとっては、学生集めにおいて非常な困難に直面することとなり、変化を余儀なくされたと言える（Studer-Ellis 1996）。

表 5. 1960 ～ 1990 年における女子大学の変化、及び 18 歳人口の推移と社会的出来事

年	女子大学数	1962年の大学数を基準とした場合の%	宗派系女子大学	共学化大学数	合併大学数	解散大学数	創設大学数	18歳人口（千人）	社会の出来事
1960	176	96.2	133	0	0	0	1	2,613	
1961	179	97.8	136	0	0	0	3	2,976	
1962	183	100.0	139	0	0	0	4	2,816	
1963	182	99.5	139	3	0	0	2	2,786	
1964	181	98.9	138	2	1	0	2	2,763	公民権法成立
1965	181	98.9	139	1	0	0	1	3,804	第二ヴァチカン公会議(1962-65)
1966	180	98.4	139	2	0	0	1	3,536	
1967	175	95.6	136	5	0	0	0	3,545	
1968	172	94.0	133	4	1	1	3	3,539	
1969	149	81.4	114	21	2	0	0	3,676	※ Princeton, Yale → Coed.
1970	134	73.2	101	16	0	0	1	3,781	※ Vassar（women）→ Coed.
1971	116	63.4	84	16	3	0	1	3,878	
1972	109	59.6	79	5	0	2	0	3,976	Title Ⅸ /W.C.C. ※ Dartmouth → Coed.
1973	103	56.3	72	6	1	2	3	4,187	W.E.E.A.
1974	98	53.6	69	4	0	2	1	4,102	
1975	90	49.2	61	4	2	3	1	4,256	Title Ⅸ in Effect
1976	90	49.2	62	1	0	0	1	4,266	
1977	90	49.2	62	0	0	1	1	4,257	※ Harvard → Coed.
1978	88	48.1	61	0	1	1	0	4,247	
1979	87	47.5	60	1	0	0	0	4,316	
1980	86	47.0	59	1	0	0	0	4,252	E.O.S.E.A.
1981	86	47.0	59	0	0	0	0	4,172	
1982	82	44.8	56	3	0	1	0	4,133	M.U.W. 違憲判決
1983	82	44.8	56	0	0	0	0	4,028	※ Columbia → Coed
1984	81	44.3	55	0	0	1	0	3,799	
1985	79	43.2	54	2	0	0	0	3,695	
1986	74	40.4	49	4	1	0	0	3,607	
1987	71	38.8	47	3	0	0	0	3,667	
1988	69	37.7	46	2	0	0	0	3,780	
1989	66	36.1	43	1	1	1	0	3,906	
1990	65	35.5	43	1	0	0	0	3,663	
			合計	108	13	15	26		

ベトナム戦争（米参戦）

※ 1. 1960 年代後半～ 70 年代：第二次フェミニズム運動（特に 70 年代前半）。
※ 2. 下線は法律関連
Title Ⅸ：the Education Amendments of 1972 W.E.E.A.：The Women's Educational Equity Act
W.C.C.：Women's College Coalition の設立　E.O.S.E.A.：Equal Opportunity in Science and Engineering Act
M.U.W.：Mississippi University for Women
出典：Erich Studer-Ellis（1996）*The Social Transition of Four-Year U.S. Women's Colleges, 1960 to 1990*（Dissertation submitted to Duke University），p.72 より作成。
・18 歳人口については、U.S. Census Bureau のネットデータより作成。
https://www.census.gov/popest/data/national/asrh/pre-1980/PE-11.html
https://www.census.gov/popest/data/national/asrh/1980s/80s_nat_detail.html
https://www.census.gov/popest/data/intercensal/national/index.html
（いずれも Estimates of the United States Resident Population）
・社会の出来事については、著者が付け加えた。

表 6. 1960 年以降における女子大学の 30 年後における変化

1990 年における状況	合　計 (a)	私立 非教派 (b)	教派関連 (c)	Catholic (d)	Protestant (e)	公立 (f)	
女子大学	65	21	43	30	13	1	上段＝大学数
	32	51.2	27.7	23.4	61.9	9.1	下段＝%
共学大学	108	15	83	77	6	10	
	54	36.6	53.5	60.2	28.6	90.9	
合併	13	2	11	10	1	0	
	6.5	4.9	7.1	7.8	4.8	0.0	
解散	15	3	12	11	1	0	
	7.5	7.3	7.7	8.6	4.8	0.0	
合計	201	41	155	128	21	11	
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	

＊ a=b+c+f,　c=d+e
※ Erich Studer-Ellis（1996）*The Social Transition of Four-Year U.S.Women's Colleges, 1960 to 1990*（Dissertation submitted to Duke University）,p.71 より作成
表　の1960年の女子大学数と合計が合致しないのは､新たに創設された女子大学の変化も含まれているため。

カソリックの女子大学の大きな変化について、Goldin（2010）は次のようなデータを示している。1835 年以降において共学化したカソリックを除く全大学のうち、20％はこの 1967 年～ 1975 年の間に共学化したのに対し、カソリック大学だけに絞ると、実に 53％がこの 9 年間に共学化したことになり、カソリックを除くとその共学化率は極端に低くなる。どれだけそのスピードが急であったかが分かる。

まとめに代えて

本稿では、19 世紀から 1960-70 年代までという時期までに限定し、アメリカにおける女子大学の社会的変遷を概観してきた。次論文においてこの続きを書き、完結させるつもりであるが、ここでは小括ということで、これまでの内容をまとめておく。

19 世紀に女子のための中等教育機関、あるいは Finishing School に近いものとして、北東部、あるいは東部を中心に誕生していった Seminary や Academy が、19 世紀後半より、女子大学へと発展していった。男子の大学と教育内容や入学者の質において同等ではなかったものの、それぞれの地域において“大学”というステイタスを獲得していった。それまで男子の占有物であった大学が、女性用としてではあっても大学への門戸が開かれたのである。これと同時期の 1837 年、創立早々の Oberlin College が共学化するのを皮切りに、19 世紀中葉から共学大学が次々に創設されるようになる。特に、南北戦争中以降の連邦政府による Morrill Land-Grant Acts により州立の Land Grant College が数多く設立された。それらの多くが共学制をとったことで、女子の高等教育機関進学は飛躍的に

増加し、19 世紀終わりにおける高等教育機関の女子比率は 35％を上回るまでになった。

20 世紀になっても共学大学の創設は相次ぎ、急速に増加した。男子大学の創設は非常に少なくなる一方で、女子大学の数も着実に増えていった。特に 1920-30 年代においては、これまで数が少なかったカソリック系の女子大学が数多く創設されていくようになる。その頃になると、高等教育機関における女子比率は 4 割を超えるまでになった。

WW Ⅱ後、GI Bill 法などにより男子の服役していた軍人が大学に入学するなどして、女子学生の比率は 30％近くまで落ち込むが、その後、急速に回復した。女子大学は戦後も着実に増え続け、1960 年頃にはその数はピークを迎え、200 校以上になった。その頃の女子大学のうち、カソリック系大学は、女子大学全体の 4 割を占めるまでになっていた。

1960 年代にはベビー・ブーマーが大学入学を迎えるようになり、大学進学者、進学率ともに急速に増加していった。こうした急速に増大した大学進学者を主に吸収したのは、州立大学であった。一方、1970 年前後より、女子大学、男子大学の共学化は急速に進み、1974 年には女子大学数は 100 校を割るまでになった。この時期、伝統と高い威信をもつ“Seven Sisters”のうち、Vassar は共学化し、Radcliffe は Harvard に吸収された。女子大学進学者のほとんどは共学大学に収容されていったのである。以後、女子大学の数は着実に減少し続けている。

以上、途中で終わった感があるが、1960 年代、70 年代の社会的要因の詳細な検討および、1980 年代以降の女子大学の動向については、引き続き次号の論文にて述べることとする。

注

1）Chatham University HP（http://www.chatham.edu/about/tradition.cfm）Dec.10, 2015.Access.

2）“Saving Sweet Briar”Site（https://savingsweetbriar.com/）. Dec.10, 2015 Access.

3）19 世紀における史実については、主として Woody（1929a,b）、Solomon（1985）、及び Martinez Aleman & Renn（eds.）（2002）に基づいて、史実を述べていく。必要に応じ、各大学の HP も閲覧した。

4）これに先立つ 1835 年、Lyon は Wheaton Female Seminary の設立を手助けしたが、Mount Holyoke 設立のため、短い期間でこの学校を去っている。Mount Holyoke のカリキュラム改革等については、坂本（2002）に詳しい。

5）Lyon と Beecher は助け合いをしたが、その目指すところの女性教育のあり方は異なる部分も少なくなかった。この詳細については、Turpin, A.L. 2010, The Ideological Origins of the Women's College に詳しい。

6）この 7 大学による会議が始まったのは 1926 年のことであった、Alma Mater p. x vi）

7）各女子大学が大学のチャーター（Charter）を得た年は、次のデータから確認した。
バーナード：https://archives.barnard.edu/sites/default/files/charters_amendments_inventory_incomplete_updated-6-21-13.pdf（以下、いずれも．May 10, 2015 Access）
ブリンマー　：http://www.brynmawr.edu/about/history.shtml
ﾏｳﾝﾄﾎﾘﾖｰｸ：https://www.mtholyoke.edu/marylyon/openingday
ラドクリフ　：http://www.radcliffe.harvard.edu/about-us/our-history
スミス　　：http://www.smith.edu/collegerelations/sophia.php
ウェルズリー：http://www.wellesley.edu/news/2013/03/node/34149
ヴァッサー　：http://deanofthefaculty.vassar.edu/docs/VassarGovernance.pdf

8）Vassar College の成り立ちやカリキュラム、学生生活については、Taylor & Haight（1915）の Vassar に詳しい。或いは、“Seven Sisters”の創設経緯や 1930 年代までの学生生活、カリキュラム、大学としての方針などについては、Horowitz, Helen Lefkowitz.（1984）Alma Mater において詳しく述べられている。

9）Wesleyan College Homepage（http://www.wesleyancollege.edu/about/history.cfm）May 10, 2015 Access.

10）Cornell Univ. Homepage（http://www.cornell.edu/search/index.cfm?tab=facts&q=&id=809）.May 10, 2015 Access.

11）初期の共学大学は abolitionist（奴隷廃止論者）、Congregationalist 会衆派［組合教会］信者（Quaker、Methodist、長老派）など、一般に「平等」の主張にかかわっている人たちであり、若い国のより新しい地域、つまりはオハイオなどを含む西部において創設された。1860 年以前に創設された 54 の共学大学のうち 27（50%）は、the Old Northwest（OH, MI, IN, IL, WI）と呼ばれる地域にあり、他の 13（24%）はミシシッピー以西にあった。北西部の共学校は 1 つに過ぎなかった。（Goldin 2010, pp.3-4）

12）カソリック系女子大学はこのように 1920-30 年代頃から急速に増加し、本稿 4 節で示しているように 1960-70 年代においてはプロテスタント系と比べて急速に共学化がなされ、閉鎖も相次いだ。こうしたカソリック系女子大学の独特の変化の要因については、別稿にて改めて検討したい。

13）1961 年と 75 年の比較では、州立大学では毎年 30～40 万人規模で増え続け、15 年間で 256 万から 883 万人、つまり 3.45 倍となった。これに対し、私立大学の学生数は 158 万から 235 万人へと 1.48 倍の増加にとどまった（2 年制の学位授与大学を含む学生数）。この時期に増加した学生の収容を受け持ったのは州立大学であった。NCES 2012, Table 221、（http://nces.ed.gov/programs/digest/d12/tables/

dt12_221.asp）

14）アメリカの女子大学の把握は難しい。日本と異なり、学部でも男性が少数ではあるが入学しているケースは多い。その大学が「女子大学」であると認識しているかどうかによる。また、これらの数字は、2年制の女子大学を含んでいる場合がある。

15）高卒者の大学進学率は1960年から1970年の10年で、全体で約7%増加した。特に女性の進学率の伸びは大きく、10%以上あった。1960年に16%あった男女差は、1970年には7%まで縮小した。

1960年：45.1%（女子37.9%、男子54.0%）、1970：51.8%（女子48.7%　男子55.2%）

NCES1999,Table 187 "College enrollment rates of high school graduates, by sex: 1960 to 1998"（https://nces.ed.gov/programs/digest/d99/d99t187.asp）

16）アイビーリーガー8大学のうち、Cornell, Univ. of Pennsylvania、Brownの3大学が19世紀中に共学化したが、残りの5校が共学化するのは1969年以降である。YaleとPrincetonがともに1969年、Dartmouthが1972年、Harvardが1977年、最も遅いColumbiaは1983年であった。しかも全く制限なく女性を受け入れるのではなく、男女比を設け、男性に優位性を持たせるなどといったこともなされていた（Harvard Crimson 1974）。また、これらの男子のみの大学は、Coordinate College（あるいはAll-female affiliate）と呼ばれる女子大学をもっていたという理由も考慮しなければならない。例えば、HarvardとRadcliffe、ColumbiaとBarnard、BrownとPembroke、YaleとVassarなど。（Miller-Bernal & Poulson 2004）

引用・参考文献

安東由則（2014）．アメリカにおける女子大学のプロフィール，研究レポート（武庫川女子大学教育研究所）44, pp.59-88.

Chamberlain, M. K.（ed.）（1988）．*Women in Academe: Progress and Prospects,* New York: Russell Sage Foundation.

江原武一（1994）．現代アメリカの大学：ポスト大衆化をめざして，玉川大学出版部

Harvard Crimson（1974）．"A Survey of Co-education in The Ivies：Slowly But Steadily, The Ratios Even Out." *The Harvard Crimson,* October 4, 1974（http://www.the crimson.com/article/1974/10/4/a-survey-of-co-education-in-the/）May 15,2015 Access

Harwarth, I., DeBra, E., & Maline, M.（1997）．*Women's Colleges in the United States: History, Issues And, Challenges,* DC: National Inst. on Postsecondary Education, Libraries, and Lifelong Learning.

Goldin, C., Katz, L. F., & Kuziemko, H.（2006）. The Home Coming of American College Women: The Reversal of the College Gender Gap, *Journal of Economic Perspective*. 20（4）, pp.133-156.

Goldin, C., & Katz, L. F.（2010）. Putting the Co in Education: Timing, Reasons, and Consequences of College Coeducation from 1833 to the Present, *National Bureau of Economic Research Working Paper Series Working Paper*. No.16281, pp.1-25 & appendix（http://www.nber.org/papers/w16281）. Feb.5,2014, Access.

ホーン川嶋瑤子（2004）. 大学教育とジェンダー：ジェンダーはアメリカの大学をどう変革したか, 東信堂 .

Jencks, C. & Riesman, D.（1969）. *The Academic Revolution, Doubleday,*（＝国弘正雄訳（1975）. 大学革命, サイマル出版会）

Karabel J.（2005）. The Chosen: *The Hidden History of Admission and Exclusion at Harvard, Yale, and Princeton,* Boston: Houghton Mifflin.

Horowitz, Helen L.（1984）. *Alma Mater: Design and Experience in the Women's Colleges From Their Nineteeth-Century Beginnings to the 1930's*. New York: Alfred A. Knopf.

Mahoney, K. A.（2002）. American Catholic Colleges for Women: Historical Origins. In Tracy Schier T. & Cynthia Russett,（eds.）, *Catholic Women's Colleges in America*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press. pp.25-54.

Miller-Bernal, L.（2000）. Separate by Degree: *Women's Students' Experiences in Single-Sex and Coeducational Colleges,* New York: Peter Lang Publishing.

Miller-Bernal, L., & Poulson, Susan L.（eds.）,（2004）. *Going Coed: Women's Experiences in Former Men's Colleges and Universities, 1950-2000,* Nashville: Vanderbilt University Press.

村田鈴子（2001）. アメリカ女子高等教育史：その成立と発展, 春風社 .

National Center for Education Statistics（Synder, Thomas D.（ed.））,（1993）. *120 Years of American Education: A Statistical Portrait,* Washington, D.C.：U.S. Dept. of Education, Office of Educational Research and Improvement.

Newcomer, M.（1959）. *A Century of Higher Education for American Women,* New York: Harper & Brothers.

坂本辰朗（1999）. アメリカの女性大学：危機の構造, 東信堂 .

坂本辰朗（2002）. アメリカ教育史の中の女性たち：ジェンダー、高等教育、フェミニズム, 東信堂 .

Shier, T. & Russett, C.（2002）. Introduction, Tracy Schier T. & Cynthia Russett,（eds.）

2002. *Catholic Women's Colleges in America. Baltimore:* The Johns Hopkins University Press. pp.1-16.

Solomon B. M.（1985）. *In the company of Educated Women: A History of Women and Higher Education in America,* New Haven, CT: Yale University Press.

Studer-Ellis, Erich M.（1996）. *The Social Transformation of Four-Year U.S. Women's Colleges, 1960 to 1990*, Dissertation to Department of Sociology, Duke University.

Taylor, James Monroe, & Haight, Elizabeth Hazelton.（1915）. *Vassar*. New York: Oxford University Press.（2009, Reproducted by BiblioLife）

Trow, Martin,（1973）. Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education. OECD.（＝天野郁夫・喜多村和之訳（1976）. 高学歴社会の大学：エリートからマスへ, 東京大学出版会）

Turpin, Andrea L.（2010）. The Ideological Origins of the Women's College: Religion, Class, and Curriculum in the Educational Visions of Catharine Beecher and Mary Lyon. *History of Education Quarterly*. 50（2）, pp.133-158.

Wolf-Wendel, L. E.（2002）. Women's Colleges. In Ana M. Martínez Alemán, & Kristen A. Renn.（eds.）, *Women in Higher Education,* CA: ABC Clio, pp.61-67.

Woody, Thomas.（1929a）. *A History of Women's Education in the United State*. Vol.1, New York: The Science Press.

Woody, Thomas.（1929b）. *A History of Women's Education in the United State*. Vol.2, New York : The Science Press.

インターネットデータ

National Center for Education Statistics（NCES）. "Digest of National Statistics"（https://nces.ed.gov）May, 2015 – Jan. 2016.Access.

United States Census Bureau.（http://www.census.gov/popest/data/historical/index.html）May 10, 2015. Access.

※「注」にアドレスを挙げたサイトについては、再度掲載をしていない。

付記：本論文は、平成 27-30 年度　科学研究費補助金（基盤 C）による「女子大学の存立意義とサバイバルストラテジー」（課題番号 15K04327）の研究成果の一部である。